

2012.3.29 石田九段今週のつぶやき

今日は私の誕生日。実に 65 回目です。私自身このような歳になっているなど、不思議な気すらしています。でも現実。規約により現役棋士として対局の終わりとなるのです。(正しくは後 1 局残していますが)

思い起こせば、昭和 37 年に私の恩師である名古屋の板谷四郎九段の門下となり奨励会に入会して以来 50 年、半世紀に及ぶ長い棋士生活でした。昭和 42 年四段、43 年五段、44 年六段とトントン拍子に昇段し、怖いもの知らずの勢いでした。将棋に勝つのはそんなに難しいことではない、という自惚れもあった時です。しかし、その後が大変でした。六段で 7 年も足踏みをし、スランプ状態に陥りました。悩み苦しむ、将棋の他にも精神苦を味わい、暗い青春時代でした。あの頃のことは思い出したくもありません。

昭和 49 年の今日、永年住み慣れた愛知県岡崎を離れ(これまでは岡崎に住み、そこから名古屋の板谷教室に通い、対局のたびに東京、大阪へ出向いていた)東京に移り住みました。心機一転、私に転機が訪れるのですが、永く成りましたので、その続きは次週とさせていただきます。よろしくお付き合いをお願いします。

2012.4.5 石田九段今週のつぶやき

先週からの続きです。

昭和 49 年 27 歳になったばかりの日、東京に本格的に移住することになり、新たな生活が始まりました。転居先は杉並区の阿佐ヶ谷でした。この阿佐ヶ谷大同マンション時代もまだ悶々とした日が続いていましたが、とにかく将棋に打ち込みました。将棋に打ち込むことですべてを忘れようと思えていたと言っても過言ではありません。色々な宗教を渡り歩いたのもこの頃です。しかし、悟ることなどとてもとても、でした。ただ、時運が来たからでしょうか、将棋に打ち込んだ成果が現れてきたせいでしょうか、昭和 51 年に七段に昇段することができました。その昇段の一戦を将棋世界に自戦記として書きましたが、最後の一文を紹介します。

「今この原稿を上越の水戸温泉で書いている。3 月中旬だというのに、外では雪が舞うように降っている。私の六段時代は長かった。けれど、やっと昇ることができて嬉しい。これをきっかけに大きく飛躍をしたいものだ。」

素朴な文章ですが、当時の私の心境をよく現わしていると思います。

そして、昭和 54 年、晴れて A 級に昇り八段昇段を果たしました。日本で 10 本の指に入る棋士になったという実感は今でも忘れられません。

その A 級入りと同時に NHK 将棋講座の講師を一年間務めることになりました。これが大変好評を博し(自分で言うのも何ですが)全国に石田和雄の顔と名を少しは知れ渡らせたのでした。加えて、振り飛車破りの本の出版と大忙しとなり、翌年昭和 55 年結婚、33 歳になっていました。

またまた長くなりましたので今週はこれで打ち止め。来週この続きを書かせて頂きますの

でよろしくお付き合いの程を。

2012.4.12 石田九段今週のつぶやき

またまた先週の続きとなります。何だか私の履歴書みたいに成って来ましたが、ここまで来ましたのもう少し最後までお付き合いをお願いします。

話は前後しますが、私は大変な酒豪でした。20代30代、そして40代、いや50代までは対局が終わった後などは一升位飲むのは当たり前でした。とにかくよく飲みました。(そのせいで糖尿病になるのですが)

続きに戻ります。33歳で結婚し、それに合わせて杉並区の善福寺に一戸建てを構えました。小さいながらも憧れのマイホームです。将棋一本でこの家を造ったんだと、よく家の周りを見て歩いたのを覚えています。

次の年、長男昇吾誕生、普通の家庭人となりました。私の望んでいたのは、実はこの平凡なあたり前の生活だったような気がします。

ホッとしたせいでしょうか、将棋の方が勝てなくなり、B1級に降級、以後長くB1級に定着することになります。しかし、NHK杯戦のテレビ解説にたびたび登場したり、昼のプレゼント、ウルトラアイなどに出演したりして、人気の方はそこそこあったようです。知らない人からよく声を掛けられたものです。

昭和61年39歳になったばかりの時、決意を新たにし、引っ越すことにしました。今住んでいる柏市です。柏市は女房の実家のある所で、私の故郷、岡崎に市の規模が非常によく似ています。運命というのはどう転回していくか分かりません。ここに引っ越すことにより、現在の普及の一大拠点、柏将棋センターが存在するのですから不思議です。この柏が終いの住み家となるのでしょうか。

対局の方はB1級にいて可もなく不可もなくというところでしたが、平成2年43歳になった時から突如勝ち出しました。竜王戦で、挑戦者決定戦にまで駒を進め天下の谷川九段と相まみえることになりました。ピッチを上げて書いたつもりですが、またまた長くなりましたので続きは次週とさせていただきます。

2012.4.19 石田九段今週のつぶやき

43歳の頃より趣味で家庭菜園を始めました。土に親しみ、陽に当たり、自然の空気を一杯吸ったのが気分一新となったのでしょうか、竜王戦で勝ち進み、谷川九段と挑戦者決定三番勝負を戦いました。結果は2対0で敗れ、惜しくも挑戦者にはなれませんでした。あの時が千載一遇のチャンスでした。時の竜王は羽生さんでしたがまだ若く、もし挑戦者になれば勢いからしてタイトル奪取も夢ではなかったかもしれません。振り返れば残念なことです。

しかし、ローソクの火はまだ燃え尽きず、その翌年A級にカムバックを果たしました。40代半ばでのA級入りはそう多くはない筈です。あの頃が中年パワー炸裂の最高潮の時でした。

た。今思い出しても何故、あれだけの力が出たか不思議なくらいです。

話を飛ばします。46歳の時、私はまたB級1組に戻っていましたが、対局一筋から普及にもと一大転機が訪れます。あれは確か19年前の8月のことでした。柏将棋センター（当時経営者は加瀬不知夫さん※加瀬六段のお父上）にフラッと立ち寄りしました。するとちょうど、加瀬さんが病気入院のためしばらく休ませて頂きます、と黒板に書いているところでした。休むのなら、その間私が面倒を見ましょうか、ということで引き受けることになったのです。当時、センターは土日祝しか営業しておらず、また来席数も20名程でしたから、対局をしながらでもやって行けると判断したからです。しかし、加瀬さんは退院されてもセンターを続ける気力はなく、私も柏に将棋の火が消えるのは惜しいと思い、柏将棋センターのオーナーになった訳です。全く計ったような出来事で、こうなる運命であったとしか言いようがありません。

今は故人となりましたが、これまで努力してこられた加瀬不知夫さんにはご苦労様と心よりお礼申し上げます。

その後、センターの移転等ありますが、長くなり過ぎましたので、次週に持ち越し、来週で思い出話は最終となりますので、よろしく最後までお付き合い下さい。

2012.4.26 石田九段今週のつぶやき

柏将棋センターのオーナーになった経緯は前週述べました。世間の人々の多くは将棋道場の経営と簡単に考えますが、これが本当はとても難しいことなのです。実のところ私は道場についてはズブの素人ではなかったのです。その昔、名古屋の修業時代、板谷教室の手合係を務めていたこともあり、また東京へ出てからは東中野に石田教室を開き、ファンを集めイベント等も催したりしていたのです。

しかし、実際道場経営となると想像を越える厳しいものがありました。私は営業時間中（土日祝）は時間の許す限りセンターにへばりつき（顧客住所録紛失のため）一人でも多くのお客さんを引き寄せようと懸命の努力をしました。その成果が出たのでしょうか、天運に恵まれたのでしょうか、20名ちょっとだった来客数が半年後には40数名にと飛躍的に増えたのです。このままこの場所では人が入りきれない、何とかしなければと思いましたが、一方では対局も命です。悩みに悩みましたが、次の広い場所へ移転することに決めました。幸い柏駅付近に手ごろな誠がいいところが見つかり、思い切って引っ越すことにしました。新生、柏将棋センターの誕生です。それに伴い土日祝だった営業を平日も営業することにしました。また、10名だった柏支部を東葛支部と改め、新たに発足しました。

当時の東葛支部会員は60数名でして、現在の200人ほどの支部会員数を誇る日本一の支部になろうなどは夢にも思っておりませんでした。

新しく生まれ変わった将棋センターは次第に来場者も増え、支部会員もそこそことなり、順調な滑り出しとなったのです。でも巧い話ばかりではありません。棋士としては大きな犠牲を払うことになったのです。20年近くB級1組以上にいた私でしたが、B級2組に降

級するという痛手を受けました。天二物を与えずとはこの事です。けれど、あの時の決断はあれでよかったと今は思っています。広い意味で普及の一大拠点、柏将棋センターの重みは対局を犠牲にしても余りあるものの筈です。そうでなければ納得ができません。

40代後半から50代は対局と将棋センターの二本立てで棋士生活を送りました。忙しいようでも吉田さんという優れた手合係も入ってくれ、結構楽しく過ごした時期でもありました。対局に勝って祝杯、負けて無念の思いを一杯にして飲む酒は今思えば懐かしいものです。早いもので10年ちょっと前になりますが、二人の前途有望な少年が柏将棋センターに来ました。三枚堂達也君と佐々木勇氣君です。二人は幼稚園の頃から顔を見せ、毎日のように通ってきました。私はこの少年たちの成長を生き甲斐のひとつとし、対局を見守りながらよく叱りつけていたものです。あの頃が一番楽しかったのかもしれませんが。現在、三枚堂君は奨励会二段、佐々木勇氣君は四段で将来を嘱望されています。

まずまず平穩に過ごしていた二本立ての棋士生活でしたが、厄年となった四年半前、将棋センターが火災にあうという悲劇が起ったのです。

またまた長くなりました。今週で終りのつもりの私の履歴書ですが、来週まで延長とさせて頂きます。

今度こそ本当に思い出話は終了しますので、よろしくお願ひします。

2012.5.3 石田九段今週のつぶやき

平成19年11月30日、午前6時頃に消防署より電話が掛かってきました。「柏将棋センターが燃えていますよ」と。

私は心臓が止まりそうになりました。急いで女房に車に乗せて貰い、センターに向かいましたが車中で、これで私の人生は終わってしまうのかなあ、と思ったくらいでした。

センターの前に着くと、まだ煙は残っていましたがすでに全焼、ただ茫然と見守るだけでした。直ぐに出火は一階と判り（センターは三階）まだ不幸中の幸いだと感じたものです。その後どうするか悩んでいるだけでは何も解決できません。まず皆様の要望を聞くと、是非センターは続けてくださいとのこと。さっそく次の場所捜しに移りました。

天の助けでしょうか、現在の家主様から、部屋が空いているので困っているでしょうから少しの間でも入られたらどうですか、と声を掛けられました。行って見たら部屋は清潔な感じだし、条件も誠によく、二つ返事で借りることにしました。半月後には引越しをし、センターを再開するまでに漕ぎ着けました。自ら言うのもおこがましいですが、素早い行動は周囲の人を驚かせたものです。4年半たった今も将棋センターは変わらず続け、立派に定着しています。

移転の後は貰い火による訴訟（裁判は2年続いた）。そして一番胸を痛めたのが、永年席主（手合係）としてセンターを支えてくれた吉田さんに道場を辞めて貰わざるを得なくなったことでした。更に石丸さんという人気のあった女性アルバイトの方も相次いで退くことになり、何もかもが悪い方へ向かって行きましたが、これで厄は抜けたと言い聞かせまし

た。しかし、こんなものでは収まらなかったのです。

平成 20 年 5 月、心労が重なったせいでしょうか、心筋梗塞を発症。危うく命を落とすところでした。何故、次々と不幸が襲うのか、病院のベッドの中で思いました。でも、考え方によっては梗塞にはなっていましたが、倒れる前に病院に駆けつけたのが、まだ運が良かったのです。後で医師に言われました。あと半日遅ければ心臓は止まっていたよと。天はまだ私を必要としてくれているのだと小説風に考えたものです。

あれから 4 年が経ちます。その間病魔と闘いながらも、殆ど休みなく懸命に働いてきました。人間万事塞翁が馬といいますが、最近は身体の方も大分良くなり、好きな酒もほどほどにし、規則正しい生活を送るようになりました。

柏将棋センターはボチボチですし、何より 4 年前に始めた石田九段子供教室が順調に行き、生徒数が一学級くらいになったことです。東葛支部会員数も 200 名ほどになり、4 年連続日本一になっています。

また、勝又六段一人だった弟子が、急に 3 期連続四段に昇段し、4 名となり大世帯となりました。後進の育成がやっと花を開いてきたと言えるでしょう。

将棋が好きで棋士になり、対局を生き甲斐としてきた私ですが、今年度限りで引退、対局の終りを迎えます。けれど、あまり淋しさは感じずただ十二分に指し尽くしたというのが実感です。

振り返ってみても、私はいいい時代に生き幸せな棋士生活でした。有難うございます。これからは柏将棋センターという城を拠点に一層普及活動に力を注ぎたいと思います。皆様の更なるご協力をお願い申し上げる次第であります。